

方言衰退の可視化－カテゴリカルデータ分析手法を用いて

代表研究者 山岸祐己 静岡理工科大学 情報学部 准教授

共同研究者 谷口ジョイ 静岡理工科大学 情報学部 教授

1 研究の目的

本研究の目的は、地域方言の使用・理解に関する大規模調査を実施し、得られたカテゴリカルデータをデータサイエンスの手法によって分析することで、方言衰退・消滅・再編の過程を可視化することである。従来の方言研究では、個別地域における語彙・音韻・文法の記述や、聞き取り調査にもとづく使用状況の把握が中心であった。一方で、方言の使用・理解がどの世代から低下するのか、どの意味や用法が維持されるのか、共通語や他の地域変種との接触によってどのような再編が生じるのかを、大規模データにもとづき定量的に示す研究は十分ではなかった。こうした方言接触・方言分布変化に関する問題意識を踏まえ、本研究では定量的可視化を研究課題の中心に据えた（朝日 2010；大西 2014）。

そこで本研究では、静岡方言を中心に、推量表現、過去・認識表現、地域方言語彙、現代日本語の若者ことば、危機方言としての井川方言を対象とした。これらの対象は、一見異なる現象であるが、いずれも「話者の属性と回答カテゴリの関係をもつカテゴリカルデータ」として扱うことができる。本研究では、これらのデータに対して、多項分布型レジームスイッチング検出、多群出現順位統計量、調整済み標準化残差、階層クラスタリング、MDS、ウェイトバック集計等を適用し、方言衰退の時期、地域差、世代差、意味変化、用法分布を可視化した（Yamagishi and Saito 2017；山岸・岩崎・斉藤 2018；Haberman 1973；Little 1993）。

2 研究方法

2-1 文献調査と調査項目の選定

研究代表者および共同研究者は、研究期間の初期に、静岡方言、井川方言、若者ことば、地域変種、言語変化、カテゴリカルデータ分析に関する先行研究を整理した。静岡方言は、東日本と西日本の言語的境界に位置する静岡県に分布し、東部・中部・西部・井川方言など多様な下位区分をもつ。特に、推量表現「～ツラ」「～ズラ」「～ダラ」「～ラ」や、過去・認識表現「～ケ」などは、共通語とは異なる体系を示すと同時に、近年急速な変化を見せている（牛山 1954；江端 1977；中條 1982；平山・中田 2002；井上 2022）。

また、井川方言については、地理的隔絶によって独自の音韻・語彙・語法を保持してきた「言語の島」として知られているが、人口減少と高齢化により急速な衰退が進んでいる（中條 1982；馬瀬 1981；谷口 2021；谷口・山岸 2025b）。さらに、現代日本語の若者ことばについては、「知らんけど」「あーね」「しょうみ」など、地域変種・方言由来の表現が全国的な若者ことばとして再解釈される事例が見られる。これらを対象とすることで、本研究は、古典的な地域方言の衰退だけでなく、現代的な地域変種の拡散や再編も含めて、方言衰退・言語変化を総合的に捉えることを目指した（堀尾 2022；山本ほか 2025；石川ほか 2025）。

2-2 大規模調査

本研究では、ウェブ調査を中心としつつ、必要に応じて質問紙調査を併用した。ウェブ調査は短期間で多数の回答を収集できる利点をもつが、高齢者層やインターネットを利用しない話者が過小代表される可能性がある。そのため、デジタルデバイスを使用しない協力者に対しては紙媒体の調査票を用い、可能な限り属性の偏りを抑えた。ウェブ調査に由来する標本偏りについては、後述するウェイトバック集計および事後層化ウェイトによって補正した（Little 1993；原田ほか 2025；山田ほか 2026b）。

静岡方言の推量表現に関しては、「～ツラ」「～ズラ」の使用・理解、および「～ラ」「～ダラ」「～ズラ」の使い分けについて、用例や状況を提示した上で回答を求めた。回答選択肢は、「使用する」「使用しないが理解できる」「聞いたことはあるが理解できない」「聞いたことがない」などのカテゴリを設定した（谷口・山岸 2025a）。

地域方言「いいにする」については、使用・理解に加え、短文作成課題による自由記述データを収集した。自由記述は「中止」「妥協」「許容」「中断」等の意味カテゴリに分類し、地域・年代・属性との関係进行分析した（矢板橋ほか 2024）。

若者ことばについては、現代日本語において使用される 50 項目の俗語・若者ことばを対象とし、使用経験、現在使用、理解、非理解、非接触の 5 段階回答を収集した。回答者の属性として、性別、生年、出身地域、現在の居住地を取得し、地域差・年代差・性差を分析した。調査語の選定にあたっては、現代の若者ことばを整理した既存資料を参照した（現代用語検定協会 2023；山本ほか 2025；石川ほか 2025）。

静岡方言「～ケ」については、確認、回想、発見、完了、単純過去、過去推量、過去詠嘆、定型表現、現在詠嘆、現在同意、発見＋詠嘆、遠い過去、接続形式など 12 用法＋接続形式に関する設問 3 つを対象とした。18 歳以上で、出生から中学校卒業時まで静岡に居住していた静岡方言母方言話者を対象に調査し、最終的に 1,482 名分の有効回答を得た（山田ほか 2026a；山田ほか 2026b）。

井川方言については、既収集資料および面接調査データを用い、アクセント、語彙、語法、語頭の平行音等の使用・理解を数値化した。音韻・語彙・語法の得点をもとに、世代間継承の断絶や、話者属性との関係を分析した（谷口・山岸 2025b）。

2-3 分析手法

本研究で扱う回答データは、多くがカテゴリカルデータである。例えば、ある語を「使用する」「理解できる」「聞いたことがあるが理解できない」「聞いたことがない」といったカテゴリで回答する形式である。こうしたデータは、単純集計だけでは世代差・地域差・変化時期を把握しにくい。そこで、本研究では複数の分析手法を組み合わせた（Yamagishi and Saito 2017；山岸・岩崎・斉藤 2018）。

第一に、多項分布型レジームスイッチング検出を用いた。この手法は、回答カテゴリの分布がある時点で変化したと仮定し、その変化点を推定するものである。生年を時系列とみなし、世代ごとの回答分布の変化を検出することで、語や表現の衰退・定着・再編がいつ生じたのかを推定できる（Yamagishi and Saito 2017；Rissanen 1978）。また、動的計画法に基づく大域的分割手法についても検討した（高井ほか 2025；武石ほか 2025）。

第二に、多群出現順位統計量を用いた。この手法は、Mann-Whitney の U 検定を基盤として複数カテゴリの出現頻度の傾向変化を z-score として表現し、カテゴリ間の勢力関係を比較可能にするものである。これにより、例えば「使用しないが理解できる」が減少し、「聞いたことがない」が増加するという変化を、視覚的かつ定量的に示すことができる（Mann and Whitney 1947；山岸・岩崎・斉藤 2018）。

第三に、調整済み標準化残差を用いた。回答カテゴリと話者属性のクロス集計表において、観測度数が期待度数からどの程度ずれているかを評価することで、特定の地域・年代・性別において特定の回答が多いか少ないかを把握した（Haberman 1973）。

第四に、ウェイトバック集計と事後層化ウェイトを用いた。ウェブ調査では回答者分布が母集団分布から乖離することがあるため、国勢調査等を参照し、年代・性別・地域ごとの人口構成に近づける補正を行った。第五に、階層クラスタリングおよび MDS を用い、似た回答傾向を示す語・設問・話者を可視化した（Little 1993；原田ほか 2025；山田ほか 2026b）。

3 研究成果

3-1 静岡方言の推量表現の変異・変化

静岡方言に見られる推量表現「～ツラ」「～ズラ」「～ダラ」「～ラ」について、大規模調査とカテゴリカルデータ分析を実施した。調査の結果、過去推量を表す「～ツラ」は、他の形式に比して早い段階で衰退しており、すでにほぼ消滅したと考えられることが示された。「～ツラ」については、1960 年代後半および 1990 年代前半に回答分布の構造変化が見られ、「使用しないが理解できる」が減少し、「聞いたことがない」が増加していた（谷口・山岸 2025a）。

「～ズラ」についても顕著な衰退傾向が確認された。多項分布型レジームスイッチングによる分析では、1970 年代前半、1980 年代半ば、1990 年代半ばにデータ分布構造の変化が見られた。「使用しないが理解できる」という回答は段階

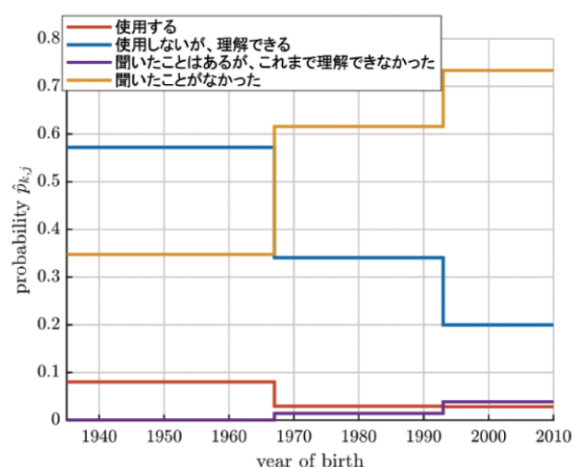


図 1: 「～ツラ」の使用・理解のレジーム例

的に減少し、「聞いたことがない」という回答は増加した。多群出現順位統計量による分析からも、1970 年前後から理解度の低下が始まり、その傾向が継続することが示唆された（谷口・山岸 2025a）。

一方、「～ラ」と「～ダラ」については、衰退だけでなく、用法上の再編が見られた。話者判断に基づく推量では「～ラ」が多く用いられるが、客観的証拠に基づく推量では「～ラ」と「～ダラ」が拮抗する傾向が見られた。また、中年層から若年層にかけて「～ダラ」の使用が増加しており、衰退する形式と維持・拡大する形式が共存する複雑な変化が明らかとなった。この成果は、谷口ジョイ・山岸祐己「静岡方言における推量表現の変異・変化 ―カテゴリカルデータ分析による可視化手法を用いて」として公表した（江端 1977；大西 2014；井上 2022；谷口・山岸 2025a）。

3-2 静岡方言「～ケ」の使用・理解

静岡方言「～ケ」は、共通語の「け」と異なり、過去、完了、発見、詠嘆、同意要求など多様な意味・機能を担う。本研究では、「～ケ」の 15 用法について使用・理解を調査した。対象者は、18 歳以上で、出生から中学校卒業時まで静岡に居住していた静岡方言母方言話者であり、有効回答は 1,482 名であった（平山・中田 2002；山田ほか 2026a；山田ほか 2026b）。

分析では、回答カテゴリと地域・年代・性別の関係をクロス集計し、調整済み標準化残差を算出した。さらに、静岡県内の人口構成に基づく事後層化ウェイトを導入し、ウェイトバック集計を行った。これにより、標本の偏りを補正した上で、地域差・世代差を検討した（Haberman 1973；Little 1993；山田ほか 2026a；山田ほか 2026b）。

結果として、共通語にも見られる確認用法「今日、ゴミの日だっけ？」は、地域差がほとんど見られず、静岡県内の広い地域で高い使用率を示した。一方、静岡方言固有の用法、特に「～っけよ」「～っけね」のように終助詞的要素を伴う用法では、県中部で使用率が高く、西部・東部との差が見られた。また、古い接続形式や低頻度の用法については、全地域で使用率が低く、衰退傾向が示唆された。この成果は、情報処理学会第 88 回全国大会および DEIM2026 で発表した（山田ほか 2026a；山田ほか 2026b）。

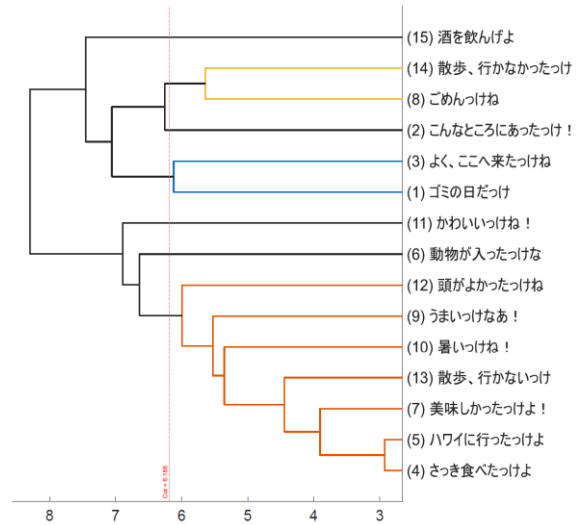


図 2：「～ケ」のクラスタリング例

3-3 地域方言「いいにする」の意味用法と維持

静岡方言「いいにする」は、「中止」「妥協」「許容」「中断」など複数の意味で用いられる表現である。本研究では、当該表現が共通語に収束せず維持される要因を明らかにするため、大規模調査および短文作成データの分析を行った（矢板橋ほか 2024）。

調査では、1 万名規模の回答を収集し、そのうち短文作成課題の自由記述を意味カテゴリに分類した。有効と判断された短文について、独立性検定および多群出現順位統計量による分析を行った。その結果、「いいにする」は地域・年代に関わらず広く使用・理解されており、話者が地域方言であると強く認識していない可能性が示された。これは、方言形が維持される要因として、顕著性の低さが関与していることを示唆する（Auer et al. 1998；矢板橋ほか 2024）。

一方で、用法レベルでは地域差が見られた。静岡県中部では、「妥協」や「中止」の用法が特定の世代で顕著に現れた。他地域では「中断」などの用法に異なる傾向が見られ、単に語形が維持されているだけでなく、意味カテゴリの分布にも地域的・世代的差異があることが明

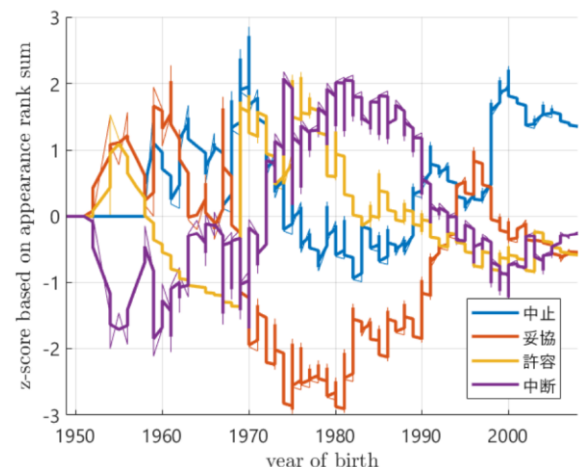


図 3：静岡県中部の「いいにする」使用・理解の指標化例

らかとなった。この研究は、第 23 回情報科学技術フォーラムで発表し、FIT 奨励賞を受賞した（矢板橋ほか 2024）。

3-4 若者ことばに見られる地域変種の影響

本研究では、地域方言の衰退だけでなく、現代日本語における新語・若者ことばの地域差にも注目した。若者ことばは一般に、首都圏から地方へ伝播するものとして説明されることが多い。しかし本研究では、「知らんけど」「しょうみ」「あーね」など、地域変種・方言に由来する表現が若者ことばとして広がる事例を可視化した（堀尾 2022；山本ほか 2025；石川ほか 2025）。

「知らんけど」については、関西地方、とりわけ大阪・兵庫周辺で使用度が高く、東日本では使用・理解の度合いが低いことが示された。「あーね」については九州地方、特に福岡周辺で使用が多く見られた。また、「しょうみ」についても関西地方での使用が顕著であり、地域変種が若者ことばとして再編・拡散していることが明らかとなった（山本ほか 2025；石川ほか 2025）。

年代差の分析では、語ごとの定着・衰退の傾向を分類することができた。例えば、「ワクテカ」は、過去に使用していたが現在は使用しないという回答が特定世代に多く、衰退傾向が示された。一方、「ガクチカ」は若年層を中心に使用が見られ、今後定着する可能性が示唆された。これにより、若者ことばの発生・拡散・衰退にも地域変種や世代差が大きく関与していることが明らかとなった（原田ほか 2025；高橋ほか 2025）。

3-5 静岡・井川方言に見られる急速な言語シフト

本研究では、静岡市葵区井川地域の方言についても分析を行った。井川方言は、かつて地理的隔絶によって周辺地域との接触が限られていた「言語の島」とされ、無アクセント、語頭のパ行音、上代東国方言の残存とされる語法など、独自の特徴を有していた。しかし、現在では人口減少と高齢化が急速に進み、方言継承が困難になっている（中條 1982；馬瀬 1981；谷口・山岸 2025b）。

調査では、アクセント、語彙、語頭のパ行音、語法について、使用・理解を数値化した。生年別に得点率を比較すると、1930 年代以前生まれ、1940 年代生まれ、1950 年代生まれでは比較的高い得点が見られたが、1960 年代以降生まれでは得点が大きく低下した。特に、アクセント、語法、語彙の各項目において、若年層では井川方言の使用・理解が大きく失われていることが示された（谷口・山岸 2025b）。

階層クラスタリングおよび MDS による分析では、調査協力者が高年層クラスと若年層クラスに大きく分かれ、世代間継承の断絶が明確に可視化された。さらに、交通の発達、ダム建設に伴う人口移動、メディアの普及、学校教育、地域内人口の減少などが、急速な言語シフトの要因として考察された。この成果は、査読付き論文「静岡・井川方言に見られる急速な言語シフト：世代間継承の断絶および活性化プロジェクト」として公表した（谷口・山岸 2025b）。

3-6 カテゴリカルデータ分析手法の発展と応用

本研究では、方言データ分析に用いた手法の理論的・応用的展開も行った。多項分布型レジームスイッチング検出については、従来の食欲法に加え、動的計画法による大域的なレジーム分割手法を検討した。カテゴリカル系列データが複数のレジームに従うと仮定し、尤度最大化に基づいて分割点を検出することで、複雑な時

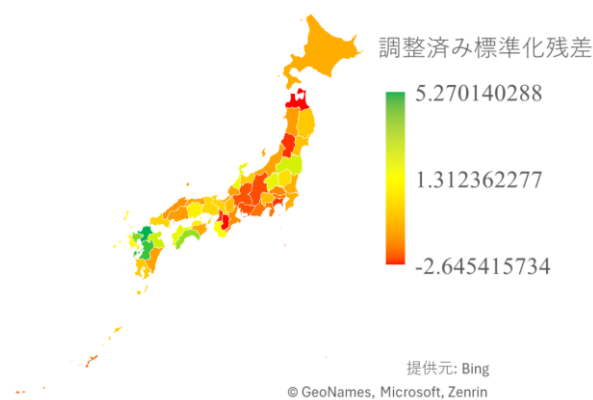


図 4: 「あーね」の使用についてのヒートマップ例

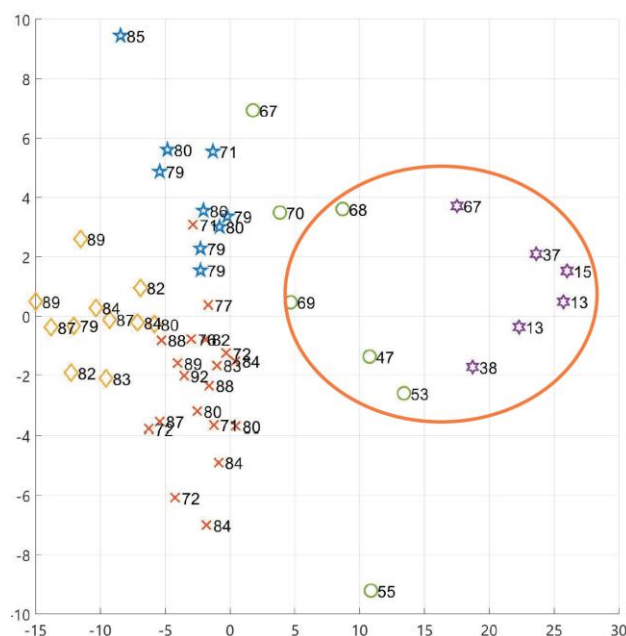


図 5: 階層クラスタリングと MDS プロット例（ラベルは年齢）

系列変化を単純化して可視化する基盤を整備した (Yamagishi and Saito 2017 ; 高井ほか 2025 ; 武石ほか 2025) 。

また、AIC、BIC、MDL、L method 等のモデル選択基準を比較し、レジーム数の選択に関する検討を行った。これにより、方言データだけでなく、レビュー評価、学習評価、レコメンド指標、順序尺度データなど、カテゴリカル・順序尺度データ全般に対する分析手法の応用可能性を示した。これらの成果は、情報処理学会全国大会、人工知能学会全国大会、DEIM、情報処理学会データベースとデータサイエンス研究会等において発表した。方言衰退の可視化という本研究課題の中心的目的に加え、カテゴリカルデータ分析手法そのものの汎用性を示した点も、本研究の重要な成果である (Akaike 1974 ; Schwarz 1978 ; Rissanen 1978 ; Salvador and Chan 2004 ; 高井ほか 2025 ; 武石ほか 2025) 。

4 研究の意義

本研究の第一の意義は、方言衰退という人文学的課題に対して、データサイエンスの方法を導入した点にある。方言の衰退は、単に特定の語が使われなくなるという現象ではなく、使用、理解、聞いた経験、意味用法、地域差、世代差が複雑に絡み合う現象である。本研究では、これらをカテゴリカルデータとして整理し、変化点推定、残差分析、クラスタリング等を組み合わせることで、衰退・維持・再編の過程を可視化した (谷口・山岸 2025a ; 矢板橋ほか 2024 ; 山田ほか 2026a ; 山田ほか 2026b) 。

第二の意義は、方言の「消滅」だけでなく、「維持」や「再編」を捉えた点にある。「～ツラ」「～ズラ」のように衰退・消滅が進む形式がある一方、「～ラ」「～ダラ」のように用法を変えながら維持・拡大する形式もある。また、「いいにする」のように、話者が方言と認識しないことで維持される形式もある。さらに、「知らんけど」「あーね」のように、地域変種が若者ことばとして拡散する事例もある。これらを同一の分析枠組みで捉えた点に本研究の特徴がある (Auer et al. 1998 ; 谷口・山岸 2025a ; 矢板橋ほか 2024 ; 石川ほか 2025) 。

第三の意義は、危機方言の記録・保存・継承に資する点である。井川方言の分析では、世代間継承の断絶が定量的に示された。一度失われた方言を復興することは困難であり、言語に内包された地域の文化や価値観も同時に失われる。本研究の可視化手法は、行政、地域住民、研究者が方言継承の危機を共有し、記録保存や活性化プロジェクトを進めるための基盤となる (谷口・山岸 2025b) 。

第四の意義は、教育的効果である。本研究には学部生・大学院生が多数参加し、調査設計、データ収集、統計分析、可視化、論文執筆、学会発表を経験した。その結果、複数の学生発表が学会賞を受賞した。人文学と情報学を横断する研究教育の実践としても大きな成果があった。

5 今後の展望

今後は、静岡方言「～ケ」の詳細分析、若者ことばに見られる地域変種の分析、カテゴリカル系列データのレジーム分割手法の改良について、査読論文として投稿する予定である。また、方言調査データの可視化を一般化し、他地域の方言や危機言語にも適用可能な分析フレームワークとして整備することを目指す (山田ほか 2026a ; 山田ほか 2026b ; 高橋ほか 2025 ; 武石ほか 2025) 。

さらに、ウェブ調査における標本偏りの補正、質問紙調査との統合、地域別・年代別のサンプル設計、データ公開における倫理的配慮など、調査方法上の課題にも引き続き取り組む。将来的には、方言衰退の進行度を地域・語彙・用法ごとに比較できる可視化手法の開発を視野に入れる。

【参考文献】

- Akaike, H. (1974) "A new look at the statistical model identification," IEEE Transactions on Automatic Control, 19(6), pp. 716-723.
- 朝日祥之 (2010) 「方言接触とことばの変化」『日本語学会 2010 年度秋季大会予稿集』, pp. 29-32.
- Auer, P., Barden, B. and Grosskopf, B. (1998) "Subjective and Objective Parameters Determining 'Salience' in Long-term Dialect Accommodation," Journal of Sociolinguistics, 2(2), pp. 163-187.
- 江端義夫 (1977) 「中部地方域方言の推量表現の分布について」『国語学』110, pp. 1-15.
- 現代用語検定協会 (編) (2023) 『現代用語の基礎知識 学習版 2023-2024』自由国民社.
- Haberman, S. J. (1973) "The Analysis of Residuals in Cross-Classified Tables," Biometrics, 29(1), pp. 205-220.

- 原田健生・山本康裕・柴田希隆・石川泉吹・山崎綾一郎・山岸祐己・谷ロジョイ（2025）「若者ことばの使用実態に見られる属性差—ウエイトバック集計による再評価」『情報科学技術フォーラム講演論文集』24th.
- 平山輝男・中田敏夫（編）（2002）『静岡県のことば』明治書院.
- 堀尾佳以（2022）『若者言葉の研究：SNS時代の言語変化』九州大学出版会.
- 井上史雄（2022）「静岡の新方言と標準語の普及過程」『静言論叢』5, pp.1-27.
- 牛山初男（1954）「推量助動詞『ずら』『ら』等の分布」『信濃』6, pp.387-392.
- Little, R. J. A. (1993) “Post-stratification: A modeler’s perspective,” Journal of the American Statistical Association, 88(423), pp.1001-1012.
- Mann, H. B. and Whitney, D. R. (1947) “On a Test of Whether one of Two Random Variables is Stochastically Larger than the Other,” Annals of Mathematical Statistics, 18(1), pp.50-60.
- 馬瀬良雄（1981）「言語形成に及ぼすテレビおよび都市の言語の影響」『国語学』125, pp.1-19.
- 中條修（1982）『静岡方言の研究』吉見書店.
- 大西拓一郎（2014）「方言分布の変化をとらえた！」『国語研プロジェクトレビュー』5(2), pp.68-77.
- Rissanen, J. (1978) “Modeling by Shortest Data Description,” Automatica, 14(5), pp.465-471.
- Salvador, S. and Chan, P. (2004) “Determining the Number of Clusters/Segments in Hierarchical Clustering/Segmentation Algorithms,” 16th IEEE International Conference on Tools with Artificial Intelligence, pp.576-584.
- Schwarz, G. (1978) “Estimating the Dimension of a Model,” The Annals of Statistics, 6(2), pp.461-464.
- 高井健人・萩田碧偉・山崎綾一郎・谷ロジョイ・山岸祐己（2025）「動的計画法を用いたカテゴリーカル系列データのレジーム分割」『第87回全国大会講演論文集』.
- 高橋基規・原田健生・山本康裕・柴田希隆・石川泉吹・山崎綾一郎・山岸祐己・谷ロジョイ（2025）「若者ことばの定着と衰退・消滅：多項分布型レジームスイッチングによる時期特定の試み」『情報科学技術フォーラム講演論文集』24th.
- 谷ロジョイ（2021）「静岡県井川方言に見られる言語変異・変化」『日本方言研究会研究発表会発表原稿集』113, pp.25-32.
- 谷ロジョイ・山岸祐己（2025a）「静岡方言における推量表現の変異・変化—カテゴリーカルデータ分析による可視化手法を用いて」『静言論叢』8.
- 谷ロジョイ・山岸祐己（2025b）「静岡・井川方言に見られる急速な言語シフト：世代間継承の断絶および活性化プロジェクト」シンポジウム「移動・境界・言語」論文集 2025, pp.29-48.
- 武石悠希・萩田碧偉・山崎綾一郎・高井健人・谷ロジョイ・山岸祐己（2025）「カテゴリーカル系列データにおける多項分布レジームのセグメンテーションとモデル選択基準の検討」『人工知能学会全国大会論文集』39th.
- 山田夕都紀・萩田碧偉・柴田希隆・山崎綾一郎・山岸祐己・谷ロジョイ（2026a）「静岡方言『～ヶ』の使用・理解における地域差・世代差の計量的分析」『第88回全国大会講演論文集』.
- 山田夕都紀・萩田碧偉・柴田希隆・山崎綾一郎・山岸祐己・谷ロジョイ（2026b）「重み付き残差特徴量による静岡方言『～ヶ』の用法クラスタリング」『第18回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム講演論文集』.
- 山岸祐己・岩崎清斗・斉藤和巳（2018）「多群出現順位統計量に基づく時系列データの変換」『情報処理学会論文誌数理モデル化と応用（TOM）』11(1), pp.45-52.
- 山本康裕・萩田碧偉・山崎綾一郎・柴田希隆・垂脇大空・山岸祐己・谷ロジョイ（2025）「日本語に見られる若者ことばの使用・理解とその変化—地域差・年代差・性差に着目して」『第87回全国大会講演論文集』.
- 矢板橋芳生・高井健人・山崎綾一郎・山岸祐己・谷ロジョイ（2024）「方言語彙『いいにする』を用いた短文作成におけるカテゴリーカルデータ分析」『情報科学技術フォーラム講演論文集』23rd.
- Yamagishi, Y. and Saito, K. (2017) “Visualizing Switching Regimes Based on Multinomial Distribution in Buzz Marketing Sites,” Foundations of Intelligent Systems: 23rd International Symposium, ISMIS 2017, Lecture Notes in Computer Science, 10352, Springer, pp.385-395.
- 石川泉吹・武石悠希・萩田碧偉・山崎綾一郎・山岸祐己・谷ロジョイ（2025）「現代日本語における若者ことばの通時的変化および共時的特徴」『人工知能学会全国大会論文集』39th.

〈発表資料〉

題名	著者	掲載誌・学会名等	発表年月
静岡・井川方言に見られる急速な言語シフト：世代間継承の断絶および活性化プロジェクト	谷ロジョイ, 山岸祐己	シンポジウム「移動・境界・言語」論文集 2025	2025年3月

題名	著者	掲載誌・学会名等	発表年月
静岡方言における推量表現の変異・変化ーカテゴリーカルデータ分析による可視化手法を用いて	谷口ジョイ, 山岸祐己	静言論叢 (8)	2025 年 3 月
方言語彙「いいにする」を用いた短文作成におけるカテゴリーカルデータ分析	矢板橋芳生, 高井健人, 山崎綾一郎, 山岸祐己, 谷口ジョイ	情報科学技術フォーラム講演論文集 23rd	2024 年 9 月 6 日
動的計画法を用いたカテゴリーカル系列データのレジーム分割	高井健人, 萩田碧偉, 山崎綾一郎, 谷口ジョイ, 山岸祐己	第 87 回全国大会講演論文集	2025 年 3 月 14 日
日本語に見られる若者ことばの使用・理解とその変化ー地域差・年代差・性差に着目して	山本康裕, 萩田碧偉, 山崎綾一郎, 柴田希隆, 垂脇大空, 山岸祐己, 谷口ジョイ	第 87 回全国大会講演論文集	2025 年 3 月 14 日
カテゴリーカル系列データにおける多項分布レジームのセグメンテーションとモデル選択基準の検討	武石悠希, 萩田碧偉, 山崎綾一郎, 高井健人, 谷口ジョイ, 山岸祐己	人工知能学会全国大会論文集 39th	2025 年 5 月 28 日
現代日本語における若者ことばの通時的变化および共時的特徴	石川泉吹, 武石悠希, 萩田碧偉, 山崎綾一郎, 山岸祐己, 谷口ジョイ	人工知能学会全国大会論文集 39th	2025 年 5 月 30 日
若者ことばの使用実態に見られる属性差ーウエイトバック集計による再評価	原田健生, 山本康裕, 柴田希隆, 石川泉吹, 山崎綾一郎, 山岸祐己, 谷口ジョイ	情報科学技術フォーラム講演論文集 24th	2025 年 9 月 3 日
若者ことばの定着と衰退・消滅: 多項分布型レジームスイッチングによる時期特定を試み	高橋基規, 原田健生, 山本康裕, 柴田希隆, 石川泉吹, 山崎綾一郎, 山岸祐己, 谷口ジョイ	情報科学技術フォーラム講演論文集 24th	2025 年 9 月 3 日
順序尺度確率分布における情報量を活用した新たなレコメンド指標の提案	山崎綾一郎, 山岸祐己, 周律旋, 小林舞, 君島真沙実, 高林貴仁, 谷口ジョイ	情報処理学会 第 181 回データベースとデータサイエンス研究会	2025 年 9 月 18 日
高い学習到達度を示す学生と学習支援が必要な学生を相対的に識別する学習評価指標の提案	山崎綾一郎, 吉永悠人, 山岸祐己, 高林貴仁, 谷川邦, 足立智子, 谷口ジョイ	情報処理学会 第 182 回データベースとデータサイエンス研究会	2025 年 12 月 19 日
重み付き残差特徴量による静岡方言「〜ヶ」の用法クラスタリング	山田夕都紀, 萩田碧偉, 柴田希隆, 山崎綾一郎, 山岸祐己, 谷口ジョイ	第 18 回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム講演論文集	2026 年 3 月 1 日
レジーム間 KL 情報量によるレビュー評点時系列の異常度分析	大石航太郎, 武石悠希, 山岸祐己, 周律旋, 小林舞, 君島真沙実, 谷口ジョイ, 高林貴仁	第 18 回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム講演論文集	2026 年 3 月 2 日
符号付き自己情報量に基づくレビュー嗜好のジャンル間クラスタリング	杉村瑞己, 山崎綾一郎, 山岸祐己, 周律旋, 小林舞, 君島真沙実, 谷口ジョイ, 高林貴仁	第 18 回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム講演論文集	2026 年 3 月 2 日
成績分布に基づく情報量指標と GPA の学習成果推移特性の比較ー共分散分析による検証ー	山崎綾一郎, 吉永悠人, 山岸祐己, 高林貴仁, 谷川邦, 谷口ジョイ, 足立智子	第 18 回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム講演論文集	2026 年 3 月 2 日
静岡方言「〜ヶ」の使用・理解における地域差・世代差の計量的分析	山田夕都紀, 萩田碧偉, 柴田希隆, 山崎綾一郎, 山岸祐己, 谷口ジョイ	第 88 回全国大会講演論文集	2026 年 3 月 6 日
成績分布の情報量に基づく学習評価指標の提案ー学生間における学習成果推移の類似度分析ー	山崎綾一郎, 吉永悠人, 山岸祐己, 高林貴仁, 谷川邦, 足立智子, 谷口ジョイ	第 88 回全国大会講演論文集	2026 年 3 月 7 日
レビュー評価の情報量時系列に基づくジャンル類似性分析と距離定義の比較検討	杉村瑞己, 山崎綾一郎, 山岸祐己, 周律旋, 小林舞, 君島真沙実, 高林貴仁, 谷口ジョイ	第 88 回全国大会講演論文集	2026 年 3 月 8 日

〈受賞〉

受賞内容	著者	受賞年月
FIT 奨励賞, 方言語彙「いいにする」を用いた短文作成におけるカテゴリーカルデータ分析, 第 23 回情報科学技術フォーラム	矢板橋芳生, 高井健人, 山崎綾一郎, 山岸祐己, 谷口ジョイ	2024 年 9 月
学生奨励賞, 動的計画法を用いたカテゴリーカル系列データのレジーム分割, 第 87 回情報処理学会全国大会	高井健人, 萩田碧偉, 山崎綾一郎, 谷口ジョイ, 山岸祐己	2025 年 3 月
学生奨励賞, 成績分布の情報量に基づく学習評価指標の提案ー学生間における学習成果推移の類似度分析ー, 第 88 回情報処理学会全国大会	山崎綾一郎, 吉永悠人, 山岸祐己, 高林貴仁, 谷川邦, 足立智子, 谷口ジョイ	2026 年 3 月

受賞内容	著者	受賞年月
学生奨励賞，レビュー評価の情報量時系列に基づくジャンル類似性分析と距離定義の比較検討，第 88 回情報処理学会全国大会	杉村瑞己，山崎綾一郎，山岸祐己，周律旋，小林舞，君島真沙実，高林貴仁，谷ロジョイ	2026 年 3 月